

うどの
鶴殿石仏群について講師 佐賀県立博物館 学芸員 竹下 正博さん
たけした まさひろ

第1回「郷土研究講座」は、総合的学習で地域の歴史と文化についての学習をすすめている唐津市立相知中学校の1年生を対象として、「鶴殿石仏群」(佐賀県史跡)について佐賀県立博物館学芸員の竹下正博さんに現地でご話していただきました。石仏群を前にして、金剛杖や法螺貝を示しながらの話に生徒はすっかり引き込まれていました。

1. 鶴殿石仏群の昨今

鶴殿石仏群は相知町の小高い丘の上にあります。現在残っている石仏は約60体で、自然の岩肌に浮彫りした磨崖仏です。磨崖仏といえば大分県臼杵市の石仏が有名ですが、規模の大きさと数の多さからいえば臼杵の石仏に次ぐもので、佐賀県の文化財として誇れるものです。

石仏の中には表面にひび割れが生じたり、剥げ落ちた部分があったりしますが、相知町が炭鉱の町として栄えていた頃の地下坑道での発破が影響したとも考えられています。

2. 鶴殿石仏群は修行の場

もともと鶴殿山平等寺というお寺があったとされています。その面影はすでにありませんが、山伏・修験者の仏教修行の場となっていました。明治5年(1872)に、その活動が禁止されるまで、山伏は自然の中で修行をして自然のパワーを身につけようとしていました。大きな木、大きな岩、流れの速い川には霊的力があると信じ、自然の中で修行をすることでその力が乗り移るということで、金剛杖をつき法螺貝を鳴らし、山野をめぐる歩いて修行していました。

3. 主な石仏

相知町内の数箇所にある石仏は全て一時期に彫られたのではなく、平安から室町時代にかけて制作されたもので、鶴殿石仏群は南北朝時代が中心です。

石仏群の中核をなす中央窟には、大日如来を中央に、左右には持国天と多聞天が彫られています。仏教の世界観では、東の方角を持国天、南を增長天、西を広目天、北を多聞天が守護しているといわれていますが、ここでは地形上の制約から

か、持国天・多聞天の二天で守護するように構成されています。この持国天は鶴殿石仏群のシンボリックな存在です。

また、南面壁の西端に不動明王が彫られ、その両脇に矜羯羅童子・制叱迦童子を従えています。不動明王は、密教では大日如来の化身ともされ、煩惱を抱える衆生を救うために忿怒の姿をしています。立像で、右手に剣、左手に羂索をもっています。向かって右側に矜羯羅童子が不動明王を見上げるように合掌しています。向かって左側には制叱迦童子が鋭い顔つきで睨んでいますが、右手には蛇を掴んでいます。このような姿の制叱迦童子は全国でも類例がありません。

4. おわりに

相知町内には、鶴殿石仏群の他に立石磨崖仏や花峰の石造観音菩薩像などがあり、石仏の伝統をもった地域です。相知の石仏の歴史の背景にある松浦の豊かな歴史に思いをはせていただきたいと思います。

(文責：佐賀県立図書館)



(南面壁中央の二天像と観音像)